

日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本動脈硬化学会
理事長 平田 健一

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

① 脂質異常症の診断基準と冠動脈疾患の管理目標値の確立

日本動脈硬化学会は、総コレステロール、LDL コレステロール、HDL コレステロール、中性脂肪の診断基準を確立するとともに冠動脈疾患予防のための脂質管理目標値を確立した。それらは、1997年に発行されたガイドラインに記載され、最新の疫学研究を参考にしながら、主要なリスク因子を総コレステロールから LDL コレステロールへの変更、non-HDL コレステロールの採用などやリスク評価を相対評価から絶対評価に変更するなどの改訂を5年ごとに行った。このほかに、原発性脂質異常症の1つである家族性高コレステロール血症の成人と小児の診断基準と治療のフローチャートを確立した。

② メタボリックシンドロームの診断基準の策定

2005年にメタボリックシンドロームの診断基準が発表された。この診断基準は、日本動脈硬化学会、日本肥満学会、日本糖尿病学会、日本高血圧学会、日本循環器学会、日本内科学会からの代表委員が複数回開催された会議のなかで診断基準を検討し2005年に日本内科学会雑誌に発表した。

③ 日本動脈硬化学会雑誌の発行

日本動脈硬化学会は、英文誌 Journal of Atherosclerosis and Thrombosis を毎月 J-Stage 上で発行している。PubMed 収載誌であり Impact Factor も付与されている。内外の動脈硬化に関する研究者より多数の論文が投稿され、年間100篇前後が掲載されている。

④ JAS Cohort Study

日本動脈硬化学会では、2015年より脂質異常症を合併した冠動脈疾患の一次予防患者における動脈硬化性疾患発症に関する観察研究を行っている。日本動脈硬化学会の会員が分担研究者となり約1,500例が登録され、脂質異常症に対する治療の現状、脳心血管病の発症、一次予防のリスク区分別脂質管理目標値におけるカテゴリー管理区分との間の相関に関する研究を行っている。研究成果は2023年に公表予定である。

b. 当該領域における国際的な役割

2021年に京都にて第13回国際動脈硬化学会を開催した。また、2016年から2018年までに松澤佑次日本動脈硬化学会元理事長が国際動脈硬化学会の会長を務めた。家族性高コレステロール血症についての欧州動脈硬化学会との患者登録に関する連携を行っている。国際的な脂質代謝の領域における日本の役割は極めて重要といえる。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

日本動脈硬化学会が発行しているガイドラインは、絶対評価に基づく冠動脈疾患の一次予防、二次予防の管理目標値を提示することから、動脈硬化の専門家だけではなく非専門医や実地医家にとっても動脈硬化性疾患を予防するために有用といえる。

d. 学会運営上留意している点

動脈硬化学は基礎領域と臨床領域の専門家によって研究が進められている特性があり、さらに臨床領域でも脂質代謝、糖代謝、循環器や病理学、薬学、栄養学、運動と多彩な専門領域を背景にもつ会員が学際的に連携している特徴をもっていることから、基礎研究から臨床的な予防医学などの幅広い分野を重視した学会運営を行うようにしている。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

日本医学会連合に所属する11学会と日本医師会、日本医学会と共同して脳心血管予防のための包括的リスク管理チャートを2015年作成した。その解説論文とチャートを日本内科学会雑誌に掲載するとともに、日本医師会と日本内科学会の会員にチャートを送付した。2019年に収載している学会のガイドラインが改訂されたことに伴い、新たに3学会が参画したうえで脳心血管予防のための包括的リスク管理チャートの修正版を作成し、日本内科学会雑誌にチャートとその解説論文を掲載した。

その他に禁煙推進学術ネットワーク、領域横断的肥満症ワーキンググループの様な領域横断的な活動に日本動脈硬化学会は積極的に協力している。